

3. シマの身体から沖縄の身体へ

- エイサーを踊る身体の歴史 -

岡本 純也



はじめに

1997年2月23日の『日本経済新聞』には、沖縄県が広告主となり、広大な面積を占める米軍基地に苦しむ県の実情を訴え、「米軍基地のない沖縄」の実現を求める全面広告が掲載された¹⁾。「新生沖縄創造元年」と題されたその広告には、パーランクー(小型の片面太鼓)を持ってエイサー(沖縄の盆踊り)を踊る子どもたちの写真が使われている。そして、紙面の三分の二を占めそうなその写真の横には大きな太字で「これまででも、これからも。」というコピーが記されている。このコピーは、その言葉の意味するところにより、過去と未来の連続性を想起させるものであるが、この広告

の中でそれが掛かっていく対象は二つあると解釈できる。

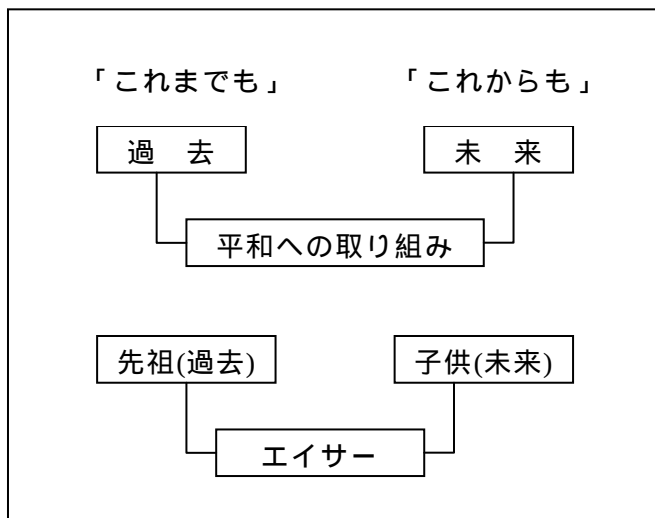
まずはこのコピーの横に小さなフォントで記されている文章を読みたい。

「家族の幸せを祈って、先祖を供養する勇壮なエイサーの踊りは、ノ子供たちも元気な笑顔で参加する沖縄の風物詩。ノそのリズムは全島にこだまし、ウチナーンチュ(沖縄県民)の心をノひとつに結び合う祭りでもあります。ノ平和で豊かな暮らしを願う沖縄の心——。ノしかし、沖縄の未来を考えたとき「基地問題」がノ私たちの願いを大きく阻んでいます。ノこの問題が解決しない限り、沖縄の豊かな未来はありません。ノ今年、沖縄は本土復帰二十五周年を迎えます。ノこの節目を二十一世紀へ向けて『新生沖縄元年』と位置づけました。ノこれまで、私たちは、『基地問題』に取り組んでまいりました。ノこれからも、私たちは、未来を担う子どもたちの幸せのためにも、ノ二〇一五年を目途に、基地のない平和な沖縄を目指して、努力を続けます。(下線引用者)」

この文章の表面的意味からは、「これまででも、これからも」というコピーが掛かっていくのは、この2つの単語(下線部)以降の文、すなわち「私たちは、『基地問題』に取り組んでまいりました」と「私たちは、未来を担う子どもたちの幸せのためにも、ノ二〇一五年を目途に、基地のない平和な沖縄を目指して、努力を続けます」という部分であり、このことにより「私たち(沖縄県)」が継続的に基地のない平和な生活に向けて努力を続けて来たことと、今後もその努力をしていくということを訴えていると解釈できる。しかし、写真と文章の前半のエイサーについて触れた部分からは「これまででも、これからも」というコピーが掛か

っていくものへの、もう一つの解釈が可能となる。

冒頭のエイサーの説明「家族の幸せを祈って、先祖を供養する勇壮なエイサーの踊りは子供たちも……」という一文は、それが過去の象徴である「先祖」と未来の象徴である「子供」を結びつける儀礼的な意味を持った祭りであるとの印象を読み手に与える。すなわち、この一文からは「私たちは」「これまでも」エイサーを踊ってきた、そして「これから」エイサーを踊り続けるということ表現していると解釈できる。以上をまとめると以下のようなになる。



このようにとらえると、過去と未来を結び、継続的に行われているものとして＜沖縄の平和への取り組み＞と＜エイサー＞が対応しており、この全面広告の中では、後者が前者のメタファーとなっているといえる。

エイサーについて語られる場合、以上の広告にもみられるように過去から営々と続けられてきたものとして表現されることが多い。すなわち、そこに冠されるのは「伝統的」「沖縄独自の文化」といった言葉である。こういった「過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的なないし象徴的特質」をホブズボウムらは「創られた伝統」と呼んだが²、まさにエイサーはその典型といえよう。ホブズボウムは「創られた伝統」を三つのタイプに類型化している。「(a)集団、つまり本当のないし人工的共同体の社会的結合ないし帰属意識を確立するか、

象徴化するもの」「(b)権威の制度ないし地位、権威の関係を確立するか正統化するもの」「(c)社会化、つまり信仰や価値体系や行為の因襲性などを説諭するのを主な目的とするもの³」である。エイサーは、「沖縄独自の文化」「伝統的」といった言葉とセットで使われることが多いので明らかに(a)の型にあてはまるであろう。「沖縄」という「共同体」に人びとを引きつけ、その社会的結合・帰属意識を確立し、象徴化しようとする。冒頭に紹介した広告は、沖縄以外の地域の者に対して沖縄の実情を訴えかけるという形式をとりながらも、一方で、エイサーを過去から未来につづく沖縄を代表する文化として扱うことによって沖縄県民の結束を高めようとする効果も持ち合わせているとも解釈できよう。

エイサーは沖縄の盆の行事として確かに先祖の霊を供養するために踊られてきた。しかしながら、お盆自体は家もしくは親族の祖先を祀る儀礼であり、エイサーも地縁・血縁で結ばれた地域の共同体（沖縄でシマと呼ばれる）が共通する祖霊を供養するための儀礼として行われてきたのである。また、盆の行事についても、エイサーを踊らない地域も多く、たとえ踊ったとしても地域によってその踊り方は多様なのである⁴。従来、シマの行事であるエイサーを、その多様性を捨象して「沖縄」全体を表象するものとして語る語り口は比較的新しいものである。ここでは、地域共同体の盆行事であったエイサーが、どのようにして「沖縄」を表象する踊りになったのか、その過程についてみていきたい。

・シマの盆行事としてのエイサー

エイサーは、「シマ」と沖縄で呼ばれる字、部落（現在は行政区となっているところが多い）が単位となって行われる旧盆の行事である。旧盆の最終日（旧暦の七月十五日）送り火が焚かれる夕刻頃にシマの青年会の男女が踊り始める。シマの共通する祖霊が祀られる祠や家、新築の家などを廻り、エイサーを踊って、お布施として金や食べ物、

酒などをもらう。三味線弾きの演奏に合わせて、太鼓打ち（太鼓を持って踊る）、手踊り（太鼓を持たずに踊る）、滑稽役（化粧などをして滑稽に踊る）などの踊り手が踊る。

さて、このエイサーはいつ頃から踊られていたのでしょうか。

池宮は、十六世紀から十七世紀に編まれた歌謡集『おもろさうし』の中の「糸さおもろ」を由来とする従来の説⁵を批判し、盆とエイサーの関係に着目しつつ、その起こりを十六世紀の古琉球の時代にさかのぼれるとしている⁶。そして、十八世紀の史料をもとに、この時期の百姓の芸能である「似せ念仏」がエイサーの直接的起源であることを示唆している。池宮の引用する史料にみられる「似せ念仏」は、歌三線に合わせながら覆面をしながら踊り手が家々を廻るというものである。その姿は以下の文章にみられる明治期のエイサーとも重なり、したがって、十八世紀には、庶民の間にも盆の行事としてこの踊りは広まっていたと見ることができよう。

「明治の末期頃までは、各部落とも、十三・四才以上の男子は、大抵同年輩の気の合ったもの同士五・六人乃至七、八人のグループをつくって、継親念仏その他を斉唱して半分は鼓を打ち半分はよい加減なしぐさをして各戸を廻り、酒（大方一合以下青年組は一合位）を貰い（これを酒クーンといった）翌日之を売って二、三銭宛分け合うのを無上の楽しみとした、幾組も代わり代わりやって来るので、各戸では『エイサー酒』として特に水を割ったものを用意して待っていた⁷。」

現在、エイサーは陸上グラウンドなどの大きな会場に隊列をなして踊るようになってきているが、この描写からは、「よい加減なしぐさをして各戸を廻り」とあるように、明治期のエイサーはみせる芸能としては未成熟で、どちらかといえば念仏を唱えて酒をもらうという行為が子どもや青年を惹きつけている盆の習俗であったとみることができる。

さて、ここまでみてきたように、芸能としての

詳細は分からないものの、エイサーは近代以前より踊られ続けてきたと理解することができる。とするならば、エイサーは「沖縄」の「伝統的文化」として語るのに問題はないといえるのか。いや、ここで問題としたいのは、現在のエイサーがあたかもそのままの姿で過去より踊り続けられてきたという語り口であり、そのことにより「沖縄」の正統なる文化としてエイサーをとらえようとする視線である。先にも触れたように、このような語り口、視線は近代以降、いや、エイサーに関していえば第二次大戦以降になってつくられたものであるのだ。

たとえば、以下の文章をみれば、戦前のエイサーは、現在のように肯定的にはとらえられていなかったことが理解できる。

「太平洋戦争以前までは、中等学校在学中の若者は勿論卒業者もエイサーを蛮俗視して撲滅すべき悪習俗と軽蔑して、絶対に之に参加しなかったのであるが、今日は高校卒業者や大学在学中の青年達も之に加わって共に楽しんでいる⁸。」

戦前の中高等学校であるから、その在学者と卒業者はいわば社会的エリートであった。その視線では、エイサーとは「軽蔑」し、「撲滅」すべき「蛮俗」であったのだ。ここにみられる視線は、廃藩置県により日本という国家に組み込まれた近代以降の沖縄において、教育を受けた社会的エリート層に共通するものであった。それは、日本へ一刻も早く同化し、キャッチアップしようとする者が、琉球時代から続く旧来の習俗を野蛮で啓かれないものとしてとらえる視線である⁹。言論界をリードするエリート層がそのように沖縄の習俗をとらえていたならば、決してエイサーを「沖縄」の文化を代表する「伝統的」「正統なる」文化とみなす語り口は生み出されないであろう。少なくとも、子どもがエイサーに参加することを肯定的にとらえるような、本論冒頭の広告に示されるような語り方は決してされないだろう。したがって、戦前と戦後にはエイサーをとらえる視線、その語り口に

は断絶が存在する。この転換はなぜおこったのであろうか。

・エイサーイベントへの人びとの熱狂

第 次大戦後、それまでシマの盆行事という文脈でしか踊られることのなかったエイサーに、それとは異なる踊りの場が生じる。都市型のイベントである。それは、基地の建設による土木建設業者や労働者の集中、米兵相手の飲食店街の発達によって短期間で都市化されたコザ市（現沖縄市）で起こった。

1956 年 7 月にコザ市は誕生するが、その直後の 8 月 26 日、複数のエイサーを集めて競演をさせる「エイサーコンクール」が開催される。このイベントは旧盆直後の日曜日に行ったということもあり、9 団体の出場により 3 万人の観客を集めている¹⁰。十分な準備期間もおかずに開催されたこの都市型イベントは成功をおさめ、それから毎年、旧盆後の日曜を利用して開催され、第 3 回には 6 万人もの観客を集める大イベントに成長した。コザ市のエイサーコンクールの成功により、沖縄本島各地で以下のように競演形式の「エイサーコンクール」や「エイサー大会」が行われるようになった。

- 1956 年 コザ市，市商工会，市文化協会共催
「米琉親善全島エイサーコンクール大会」
- 1959 年 具志川村（現在具志川市）商工会主催
「全島エイサーコンクール」
- 1961 年 美里村（現在沖縄市の一部）青年団協議会主催
「部落対抗エイサーコンクール」
- 1962 年 那覇市主催
「全島エイサー大会」
- 1964 年 読谷村青年団協議会主催
「村内エイサー大会」
- 1967 年 羽地村（現在名護市の一部）青年会主催
「羽地村エイサー盆踊り大会」
- 1968 年 宜野湾市主催

「宜野湾市エイサー大会」

1969 年 勝連村（現在勝連町）青年連合会主催
「青年エイサー大会」

これらの「エイサーコンクール」や「エイサー大会」は大学の教授や議員などの審査員が採点を行い、順位付けがなされた。踊り手となる各地の青年会は、シマの威信をかけて競演に熱中していった。これらの競演の特徴としては、青年会による工夫、創造性が奨励されていたことである。このことによりエイサーはシマで従来踊られていた型を超えて、多様なものへと変化していく。以下に審査規定の一例をみてみよう。

「審査の方法はほぼ昨年と同じで大きな変更はない。審査は 服装 隊形 態度技能 伴奏 構成 人員といった六項目を基準にして、総合点数から減点方式で採点する。審査の方法次のとおり。服装（品位，美化粧，簡素といった面からエイサーに適した服装かどうかをみる）

隊形（整然，変化，美，編成といった面から採点するが、集団舞踊としてのエイサーの意義から踊り全体の調和と統一のとれた編成美が主要な審査の対象となる）

態度技能（団体行動，精錬度，明朗，品位，威勢といった点からエイサーの技能が評価される。また、太鼓の打ち方、手おどりの技術も審査の主な対象。エイサーは元来が規律正しいおどりで勇ましくほがらかなもの。こうしたエイサーの要素も評価する）

伴奏（曲目，技術，品位，節度，音声といった面から総合的な音声の調和をみる）

構成（古典，創作，組み合わせといった面から古典のものと最近の曲節の取り合わせと、おどりの調和を採点する）このほか、今年からは三十分の制限時間を一分間超過するごとに総合得点から減点される。また、開会式におくれた場合も減点される。（第 8 回コザ市主催エイサーコンクール規定より）¹¹」

この審査規定から読み取れるのは、伝統的な型を維持、保存するという感覚の希薄さである。「集団舞踊としてのエイサーの意義から」、「エイサーは元来が規律正しいおどりで勇ましくほがらかなもの」といった、抽象化された範型は示されているものの、全体として変化や工夫に対して寛容であり、いや、むしろ青年の創造性を奨励しているとも理解できる。このことによりエイサーに何が生じたかを次にみていく。

まず、客観的に評価しやすい定量的要素は一定基準の方向へ変化していく。踊り手の参加人数はより多くなり、演技時間は最大限規定の定めるところに近づけるように努力がなされる。その様子がうかがえる「第 17 回全島エイサーコンクール大会成績一覧表」を以下に示す。

第 17 回全島エイサーコンクール大会成績一覧表

1972.8.27

順位	団体名	参加人員	演技時間
1	勝連村平安名青年会	150	30 分 46 秒
2	コザ市園田青年会	102	29 分 44 秒
3	北谷村謝苅 2 区青年会	85	26 分 46 秒
4	勝連村平敷屋青年会	83	29 分 15 秒
5	宜野湾市宜野湾青年会	70	25 分 48 秒
6	与那城村西原青年会	64	31 分 25 秒
7	コザ市センター青年会	58	32 分 52 秒
8	北谷村謝苅 3 区青年会	57	29 分 57 秒

表からは、上位の団体から下位になるにつれて参加人数が減っていったということがみてとれ、勝つためにはより多くの人員を集めなくてはならなかったということが理解できる。また、演技時間に関しては、規定の三十分以内でいかに踊るかということに努力が払われていたということが表から読み取れる。

では、数値化されづらい要素についてはどうであろうか。青年会の工夫について紹介した新聞記事をみてもみる。

「赤野のエイサーは“ エイサーどころ中部 ” でも独創的な力強い踊りとして知られている。出場するたびごとにおどりの隊形や楽器、曲節が改良され新鮮さが加えられており、見る人の目を楽しませる。中でも隊列の変化は円形から十字形、放射形、縦形と多様でその美しい調和のとれた隊形のうつり代わりは巧妙と定評がある¹²⁾。」

以上のように、隊形に関しては会場が広い校庭やグラウンドであったこともあり、さまざまな工夫がなされ、踊りながら人文字をつくる団体なども出てくるようになった¹³⁾。これらの工夫は踊りの隊列のみだけでなく、衣装も新しい要素が取り入れられたりした¹⁴⁾。

エイサーコンクールの審査規定の特徴はこれまでみたように踊り手である青年の工夫を促し、その変化をも肯定するものであったが、もう一点、教育的な側面が強調されているという特徴があったことも指摘できる。審査項目に「態度・技能」という項目が設定され、「太鼓の打ち方、手おどりの技術」という技能的側面と平行して「団体行動、精錬度、明朗、品位、威勢」といった青年の競技に対する「態度」を評価しようというものであった。さらには、開会式に遅れた団体は減点されるということも規定にはうたわれており、純粋にエイサーを評価する以外の側面も持ち合わせていたのである。このような要素が盛り込まれた審査規定からは、先述した、近代以降の沖縄知識人に共通する旧来の慣習に対する屈折した視線が読み取れる。すなわち、エイサーは古くから踊られ続けてきたものであるが、文明化に反するような「蛮俗」に堕してはならないという視線である。主催者側の意図としては、エイサーに教育的側面を取り込むことにより飼い慣らし、より精錬された文化に昇華させようというものがあったとも考えられる。ウラを返せば、エイサーコンクールに参加する青年会の熱狂、その背後で自分たちのシマの青年の演技に熱い視線を注ぐ人びとの熱狂が、ともすると行き過ぎてしまい、「蛮俗」に堕してしまう危うさをこの都市型イベントが当初より内包し

ていたともいえるであろう。

その証拠ともいえるのか、審査される青年会はコンクールに参加するにあたって、審査員の採点に対して異議申し立てを行わないという宣誓書の提出が義務づけられていたが、たびたびそれは無視され、当時の審査員の中には石や缶を投げつけられたり、審査に不服をもった者が審査員の家にまで押しかけるという事態が起こっていたようである。1967年には審査に不服をもった青年会のメンバーが審査員につめより、警察が出動する事件にまで発展したと新聞は報じている¹⁵。このような騒動が起きるほどに、競演形式のエイサーイベントは人びとを熱狂させたのである。

そして、そのような行き過ぎが問題とされ、各地の競演形式のエイサーコンクール、エイサー大会は、順位付けを行わない「祭り」形式へと次第に姿を変えていった。

- 1956年 コザ市，市商工会，市文化協会共催
「米琉親善全島エイサーコンクール大会」
→1977年「全島エイサーまつり」
- 1964年 読谷村青年団協議会主催
「村内エイサー大会」
→1969年「読谷村エイサーまつり」
- 1964年 沖縄県青年団協議会主催
「沖縄エイサー大会」
→1975年「青年ふるさとエイサーまつり」
- 1965年 具志川市青年団協議会主催
「具志川市エイサー大会」
→1971年「具志川市青年エイサーの夕べ」
- 1969年 勝連村（現在勝連町）青年連合会主催
「青年エイサー大会」
→1983年「勝連町エイサーの夕べ」

これらの「祭り形式」のエイサーイベントは、現在でも沖縄各地で旧盆周辺の時期に開催されている。

・まとめ

—多様であり、新しいけれど「伝統的」—

これまでみてきたように、エイサーは戦前より踊られてきたものであるが、戦後のエイサーコンクールという新たな踊りの場が生じたことによってその様態を大きく変化させた。先にもふれたようにシマの旧盆という文脈では起こりにくい、隊列の工夫、衣装の変更、レパートリーの創出などが行われた。このことにより、審査の対象となるような側面の工夫、変化は促され、ある面でエイサーの多様性は促進された。しかし、他方で、コンクールの上位入賞のエイサーが範型として示されることによってその標準化も進行したといえる。たとえば、1956年にコザ市のエイサーコンクールが開催されて以降、新たにエイサーを習い覚えてきて導入する地域が増えたのだが、そのような土地にはコンクールで上位入賞を果たしたことのあつる締太鼓やパーランクーを用いるエイサーが伝播することとなった。また、小林が指摘するように、沖縄本島北部の多くの地域には戦前から太鼓を用いない手踊りだけのエイサーが伝承されているが、そのようなエイサーを取りやめ、新たに太鼓を用いるエイサーを採用する地域も増えたのである¹⁶。

各地のエイサーイベントが競演形式を放棄し、祭り形式を採用したことによってエイサーの踊り手の多様性も促進された。エイサーコンクール、エイサー大会の中で、その演技を競い合う主体は青年会が主であり、子ども会や婦人会のエイサーが参加することもあったが、決して競演には参加しない副次的な存在として扱われてきた。しかしながら現在では、小学生・子ども会や婦人会をメインに据えたエイサーまつりも存在し、これらの踊り手によるエイサーも盛んになっている。本論の冒頭に紹介した広告の中の写真もそのようなイベントの中で撮られた一コマである。

現在、沖縄では観光を基幹産業としてその振興をはかっており、各地で行われるエイサーイベントも、観光客誘致の呼び物とされている。そのような中では多様な踊り手による多様なエイサーが

踊られているが、それらを紹介する際には「沖縄独自の」「伝統的」な文化として説明される。しかしながら、そのようにとらえる視線、語り口は戦後のエイサーコンクールの流行をきっかけとしたエイサーの隆盛を経て作りあげられたものなのである。

¹ 『日本経済新聞』1997年2月23日

このような広告が掲載された背景には、1995年に起きた少女に対する米兵の暴行事件をきっかけとした米軍基地撤廃運動、日米地位協定見直しに関する運動の高まりが存在する。沖縄では県民総決起集会に8万人を超える人びとが参加したが、他府県での運動は盛り上がりせず、いっこうに米軍基地による負担は軽減される方向へと向かわない。そのような実情を訴えるために沖縄県は全国紙への広告掲載に踏み切ったと考えられる。

² ホブズボウム／レンジャー編，前川啓治／梶原景昭ら訳『創られた伝統』紀伊國屋書店，1992年，10ページ

³ 同上書，20ページ

⁴ 基本的にエイサーは沖縄本島の盆行事で踊られる踊りである。小林はエイサーを踊り手の性別と用いられる太鼓の種類に着目して以下のように4種類に分類している。

女のみの手踊りのエイサー：沖縄本島北部西岸（国頭村・大宜見村）にのみ分布する。女の鑑留太鼓（本来は締太鼓）の叩き歌いに合わせて、女の手踊り手衆が右手指に手巾を挟みながら手踊りを行う。

男女対等の手踊りのエイサー：今日では主に本部町・今帰仁村・名護市など本部半島周辺に分布する。男の三線の弾き歌いに合わせ、男女の手踊り手衆が共通所作で手踊りをする。

男の締太鼓踊りのエイサー：中部各市町村で最も盛んに行われる。戦後、全島に大幅に版図を拡大してきた。男の三線の弾き歌いに合わせ、男の手踊り衆が締太鼓を打ちながら踊る。女子、あるいは男女ペアの手踊り衆が後に続くことが多い（殊に戦後に増えた）。

男のパーランクー踊りのエイサー：中部のうち、主に与勝半島（具志川市の数ヶ字・勝連町・与那城町）で行われる。特に戦後、与勝以外にも地域をやや拡大してきた。男の三線の弾き歌いに合わせ、男の手踊り手衆がパーランクー（片面の平打ち太鼓）を打ちながら踊る。男女ペアの手踊り衆が後に続くことが多

いが、概して所作も太鼓衆とは全く別に振り付けられており、控えめで、明らかに副次的な位置にあることが多い。

小林幸男「エイサーの分類」，沖縄全島エイサーまつり実行委員会『エイサー360度—歴史と現在—』那覇出版社，1998年，37～38ページ

⁵ 伊波普猷以降の以下のような定説。

「エイサーは、旧盆行事に伴う芸能である。エイサーの語源は『糸さおもろ』の『糸さ』に求められる。『糸さおもろ』は集団舞踊を伴うもので、エイサーはこれに念仏踊りを加えて作りあげられたものと考えられる。エイサーの基本もやはり円陣舞踊であるが、この円陣舞踊は大和の風流踊り系のものだといわれている。」

外間守善『沖縄の歴史と文化』中公新書，1986年，175ページ

⁶ 池宮は「この『糸さ』は伊波も指摘しているように、おもろの本文にあるのでもなく、ましてエイサーのように『エイサー、エイサー、ヒヤルガエイサー』のような、囃子から来ているのでもない。『糸さ』は単におもろさうしの巻十四の表題にのみ出ているのであって、これがエイサーと関連があるとすれば、相当な証拠の提出と論理的な展開を要することはいうまでもない。」との批判をしている。

池宮正治「エイサーの歴史」沖縄全島エイサーまつり実行委員会，前掲書，24ページ

⁷ 勝連村『勝連村誌』1966年，185ページ

⁸ 同上

⁹ たとえば比屋根は、明治期に発刊された『琉球新報』の初期中核メンバーの大田朝敷の論説を紹介し、明治期沖縄知識人の旧来の習俗に対する見方について指摘している。大田らは置県以降に政府によってとられた沖縄に対する「旧慣温存」政策を「消極的政策」と批判し、いっこうに進まない同化を沖縄側からの「下からの同化」によって打破しようとする機運を高めようとした。その背景には「置県以降、沖縄県政は政府派遣の官僚と外来の実業家たちによって独占され、沖縄側に対してはそうした県政に参加し、権力を分配する道が閉ざされていた」という社会状況があった。そこで近代以降の沖縄では教育に重点が置かれたのである。その中では、旧来の慣習は「同化」に反する忌むべき対象であったのである。

比屋根照夫「新聞にみる沖縄近代史」沖縄市『沖縄市史 第八巻 資料編7・上』1986年，13～16ページ

¹⁰ 岡本純也「戦後沖縄社会におけるエイサーの展開～ウチナンチュにとって『エイサーコンクール』とは何であったのか」沖縄全島エイサーまつり実行委員会，前掲書，53～56ページ

¹¹ 『琉球新報』1963年9月7日

¹² 『琉球新報』1963年8月28日

¹³ たとえば平敷屋青年会は平敷屋の平と平和の平をかけて「平」の字を踊り手によって描いたということが紹介されている。

『琉球新報』1963年8月31日

¹⁴ 赤野のエイサーは1963年に昔ながらのクンジー（沖縄の着物）を改めて「ワイシャツとずぼん」という合理的なものにしたと新聞に紹介されている。

『琉球新報』1963年8月28日

¹⁵ 1967年8月28日の『沖縄タイムス』はコンクール会場に「警官30人が出動」したことを報じている。

「コザ市の全島エイサー大会は、二十七日午後二時からコザ市中之町の市営球場で開かれ、中部各地の十一世年回が参加、二万余の参加者を集めて例年以上の盛り上がりを見せたが、大会終了前、同日午後九時ごろ与那城村A青年会（a青年会長）九十人と具志川村B青年会（b青年会長）八十人の二青年会が『審査は納得できない。審査員を出せ』と怒り声をはりあげて審査側に抗議、これに対し審査側は『もう閉会した。解散せよ』といって騒ぎ、このためコザ署ではパトカーなど三十余人の署員が現場にかけつけるなどいちじ騒然となり、騒ぎはやっと警察官の退場命令でおさまったが、せっかくのエイサー大会に大きなしゅうたいを見せた。（文中のA、B青年会、a、b会長は実名で報道されている）」

¹⁶ 小林前掲論文